

平成三一年度

帰国生入試 問題（国語）

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二三ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

町田圭祐（「僕」）は、中学で陸上部に所属し、全国レベルのランナーであった山岸良太と共に駅伝で活躍した。強豪陸上部がある青海学院に推薦入学することになった良太は、一緒に青海学院で陸上を続けようと圭祐を誘う。圭祐は猛勉強のいかいもあって一般入試を突破するが、合格発表の帰りに交通事故に遭い陸上のできない体になってしまった。

青海学院の入学式で、圭祐は同じ中学校出身の宮本正也に声をかけられる。正也は圭祐の声を褒め、一緒に放送部に入ろうと誘う。次の日、新入生に向けての部活紹介が行われた。

「次は、部活動紹介です。まずは、映像をご覧ください」

新入生オリエンテーションの司会者である三年生女子のアナウンスとともに、スクリーンに映像が流れ始めた。

「青海青春」というテロップのあと、軽快な音楽に合わせて、まずは運動部の活動の様子が映し出される。春休み中に撮影したのか、グラウンドの端に見える桜の木は、花が満開だ。

その前を軽快に走り抜けていったのは、良太だった。「陸上部」のテロップが重なって、次には体育館での別の部の練習風景が映し出され、そこに良太の姿はなかった。けれど、いつまでもその残像だけが頭の中に浮かび続ける。目の前の映像は、もうバスケット部が変わっているのに。

良太の新しい生活はとづくに始まっている。あそこに僕が加わることはない。充分に理解していることなのに、心臓をギュッと握りつぶされたように息苦しくなった。

放課後、グラウンドが視界に入らないように、顔をそむけて正門に向かって歩いても、陸上部のジャージを着た良太が絶対に目に入らないという保証はない。その度に、僕はこんな気持ちになってしまうのだろうか。

下駄箱の前で遭遇したら、痒くもない頭をかきながら、「授業についていくのに必死で、部活なんかやってる余裕ないんだよね」などと半笑いで言うのだろうか。

ほんやりと考えているうちに、館内が明るくなり、映像がとづくに終了していたことに気が付いた。

そして、ステージ上に現れたのは、陸上部のユニホームを着た男子生徒二人だ。

僕の左手は、無意識に左足のポルトが入っている部分に触れていた。動いているときは痛みを感じるものの、こうして、じっと同じ体勢にいるときは、何も感じることはない。

もう、走れるんじゃないかと思うほどに。

もしも、事故に遭っていなかったら。今ごろ、待ってましたとばかりに冊子を開き、陸上部の先輩たちの言葉に耳を傾けていたに違いない。

「長距離部門の目標は、全国高校駅伝大会への出場です」

壇上の、りりしい顔をした方の先輩が力強く発する、全国、駅伝、といった言葉の一つ一つに僕は強く頷いていたかもしれない。

隣の穏やかな人にマイクが渡された。

「目標は高く掲げていますが、部員全員が、初めから速く走れたわけではありません。高校から陸上を始めて、全国大会に出場した選手もたくさんいます」

この言葉に僕は勇気づけられ、放課後、早速、入部届を出しに行こうと心に決めていたはずだ。

「青海青春！ 走るのが好きな人、体を動かすことが好きな人なら、誰でも大歓迎です。ぜひ、僕たちと一緒に青春の汗を流し、夢に向かって突き進みましょう」

壇上の二人が頭を下げると、新入生たちは拍手を送った。僕もパチパチと手を合わせながら……、息を止めた。

2 込み上げてくる涙を堰き止めるために。

誰でも大歓迎、とは自分以外の全員だ。そんなふう感じた。周りのヤツら全員がうらめしく思えてくる。

こんな学校に来なければよかった。青海学院なんて受けなければよかった。そうだ、ここを受験しなければ、あの日、あの時間、あの交差点を渡ることなかったのだ。

陸上部の紹介が終わっても、サッカー部、バスケット部、と運動部が続く。どの部からも陸上部と同様に、威勢よく、全国だの、優勝だのという言葉が飛び出してくる。

逃げ出したい。そうは思っても、のろのろと足を引きずりながら歩く姿に注目されることを想像しただけで、腰を浮かせることすらできない。

ならば、寝てしまえばいいのだと、僕はぎゅつと目を閉じた。眠くもない目を無理やり閉じたはずなのに、スン、とテレビが消えるように頭の中には何も映らなくなる。

「新入生の皆さん、入学おめでとうございます」

ふと、朝のニュース番組みたいな声が聞こえたような気がして、僕はハッと目を開けた。壇上には制服姿の女子の先輩が一人、立っていた。

「これから放送部の紹介をします」

ニュース番組を読み上げるアナウンサーのような、一本芯の通った声が、心地よく耳に響く。地声というよりは、訓練して出せるようになった声ではないか。

宮本は今ごろ、熱心に耳を傾けているのだろう。もしかすると、目を閉じて聞いているかもしれない。と、自分とは関係のない部活だと思っているのに、放送部の活動内容は、僕の意志とは無関係に、耳から頭を中心まで届き、じわじわと広がっていく。

「中でも一番力を入れているのは、作品制作です。テレビドラマ、ラジオドラマ、テレビドキュメント、ラジオドキュメントの四部門の作品を作り、毎年夏に全国大会が行われる、JBKのコンテストに応募します」

JBK、年末の歌合戦や大河ドラマでおなじみの、日本国民なら誰でも知っているであろう放送局だ。

「昨年はラジオドキュメント部門で全国大会に出場することができました」

全国。放送部の先輩は、運動部のように気合いを込めず、さらりと口にした。

「残念ながら、準決勝に進むことはできませんでしたが、本校には、三年前にテレビドラマ部門で最優秀賞、日本一になったという輝かしい実績があります」

日本一、には気合いを感じた。

「青海青春。高校生の私たちには、今しか持つことのできない特別な感覚で、触れることができる世界があるはずですよ。ぜひ、それを一緒に形にして、東京のJBKホールに乗り込み、日本一を目指しましょう！」

一瞬、館内が静まり、大きな拍手が上がった。規模の大きな目標を掲げたことというよりも、声や話し方につられての盛り上がりではないかと思う。

それにしても、JBKホールとは。歌合戦の会場ではないか。吹奏楽部以外の文化部で、他校と競う大会があるということだけでも少し驚いたのに、それが、全国とか、日本一に繋がる規模のものだとは。

宮本はこういうことまで知っていたのだろうか。確かに、JBKで日本一になれば、プロの脚本家に一歩近付けそうな気がする。

とはいえ、放送部が活躍したニュースなんて、これまで聞いたこともない。全国大会といっても、出場校の少ない、県大会を四校くらいで争うといった、広き門なのではないだろうか。

青海青春、と締め言葉の頭に付けることになっているのだろうけど、放送部の作品制作に、練習や努力、汗を流す、といったイメージは湧かない。

入るつもりもない部活に対して、頭の中で文句を垂れ流すほどに、自分は泥臭い青春を欲していたのだということにうんざりして、大きなため息をついてしまう。

特に興味を惹かれる文化部もありません、新入生オリエンテーションは終了した。

準備は上級生がしてくれたけれど、片付けは一年生も手伝うらしく、自分が座っていたパイプ椅子を体育館の指定された壁際まで運ばなければならぬ。

立ち上がって椅子をたたみ、クラスのヤツらの最後尾にダラダラとついていっていると、流れに逆らうようにして、良太がやってきた。

「椅子、運ぶよ。貸して」

僕の足を案じて駆け付けてくれたのか。

「いいよ、これくらい」

遠慮したのでも、テレたのでもない。ケガ人扱いされるのが嫌で、本気で断った。

「俺、片付け当番だから」

良太はいつものさりとした口調で言うと、僕の持っているパイプ椅子に手をかけた。良太のクラス、一組が当番なのか。じゃあ、と僕は椅子から手を離れた。

「ほら、陸上部、てきぱき動け！」

ステージ上から声を張り上げたのは、陸上部の顧問らしき教師だ。当番は陸上部。良太の顔が少し曇った。それが、ムカつく。

⁶「やっぱり、いいよ」

「あー、町田ー」

良太から椅子を奪い取るため、手をかけようとした横から、声をかけられた。

宮本だ。ニヤニヤと笑っている。

「山岸くんも久しぶりだね」

宮本は良太にも愛想よく声をかけ、良太も薄く笑い返した。はからずも、三崎中から青海学院に進学した同級生、勢揃いだ。

僕と良太と宮本の共通点は、三崎中出身だということ。多分、それだけだ。

これが女子同士なら、手を取り合って、高校でもよろしくね、などと、はしゃぐのかもしれない。内心、互いにどう思っていたとしても。だけど、男同士の場合、そんな空気すら生じない。

無言のヘンな間ができてしまう。

僕をはさんで二人がいるのだから、この間は、僕が断ち切らなければならないのではないか。

「宮本も、僕の椅子運びを手伝いに来てくれたのか？」

とっさにこういう台詞しか出てこない自分が嫌になる。

卑屈。漢字ドリルにしか出てこない単語だと思っていたのに、今の僕を表すのにぴったりの言葉になってしまっている。

「そんなわけないじゃん」

ケロリとした顔で宮本が答えた。

「愛の告白の返事を聞こうってときに、相手が一番嫌がりそうなことをするヤツなんかいないよ」

宮本はニカッと歯を出して笑った。

反して、⁷良太の顔が曇る。愛のなんちゃらが気持ち悪いからではないはずだ。

宮本は、僕がケガ人扱いされるのを嫌がることに気付いている。

「二人って、中学のとき、同じクラス？」

良太が僕と宮本を交互に見ながら訊いた。本当は、仲が良かった？ と確認したいのだろうけど。

昨日少し話しただけ、と正直に答えたら、⁸良太はさらに落ち込むような気がする。

「ぜんぜん。昨日、初めて話したもんな」

宮本が呑気そうに答えた。僕と良太のあいだに流れる空気を、宮本はどんなふうに感じ取っているのか、わからない。

「な」と、もう一度言われて、「そうそう」と僕は頷いた。

「でも、誤解しないように。愛の告白ってのは、こういうのじゃないから」

宮本が良太に腰をくねらせながら言う。

「う、うん……」

良太は宮本を警戒するように一歩退いた。

「俺さ、今、町田を部活勧誘中なんだよ」

「部活勧誘中？」

良太が宮本に訊き返した。

良太は「部活」というワードは僕に対して禁句だと思っている。なのに、宮本は平然と口にした。とまどっているのが、良太の薄い表情からでも伝わってくる。

僕も、昨日はこんな顔で宮本の話聞いていたんじゃないだろうか。

「そう。ちなみに、相手の言葉をそのまま返す『おうむ返し』は脚本ではあまりよくない会話の手法として、教本に挙げら

れているんだけどね」

宮本は得意げに続けた。いきなり「脚本」と言われても、良太はきよとした顔だ。

しかし、宮本は良太の表情などおかまいなしに、僕に顔を向けた。

「で、考えてくれた？」

「いや、それが……」

高校では部活をやらない。そう強く決意したはずなのに、はっきりと口にする事ができなかった。

良太がいるからだ。

入院中、良太は何度か病院に見舞いに来てくれた。

退屈しのぎにと、毎回、マンガ本を数冊持ってきてくれたけど、良太が読んでいたものというよりは、話題の作品を新しく買ってきてくれたというような、折り目も紙の色あせもないものばかりだった。

僕の事故について、ひき逃げ犯が見つかっていない、ということは話しても、足の状態については、ほとんど話題にしなかった。

——足に磁石がくっつくかも。

一度、おどけて言ったことがある。良太は笑うどころか、まるで涙をこらえるように顔にギュッと力を込めただけだった。

そして、「ごめん」とつぶやいて、逃げるように病室を出て行った。

良太が謝ることなど何もない。

事故現場に一緒にいたとか、横断歩道を渡っている最中に良太から電話がかかってきたとかいうならまだしも、僕の交通事故と良太とはまったく無関係だ。

同情はしても、罪悪感を抱く必要はない。

なのに、良太は僕に謝った。

あれは、僕を青海学院に誘ったことに対してではないかと思っている。

そして、良太の後悔は今も続いている。

「見学に行ってから、決めようかな」

9 またもや、思ってもいないことを宮本に言ってしまった。

「おおっ。だよな、見学に行かなきゃな」

肩に手をのせ、バンバンと叩かれる。宮本には「入部する」と聞こえたのだろうか、と疑ってしまうほどのしやぎつぶりだ。

おいてけぼりをくらったような顔の良太と目が合った。

「宮本から、放送部に誘われたんだ。活動内容をまったく知らなかったんだけど、ドラマ作りとか聞くと、ちょっとおもしろそうかなと思って」

そう言う僕は今、ちっともおもしろそうな顔をしていないはずだ。

「そっか。俺、ドラマはあまり興味なかったけど、圭祐が作るのなら見てみたいよ」

10 良太の顔も泣き笑いのように見える。

「でも、脚本を書くのは俺なんだな」

宮本が割って入ってくる。

「町田には……。なんか、三人で話してるのに、苗字と名前が交ざるのって、ややこしくない？ 呼び名は統一すべし。ってことで、圭祐って呼ばせてもらうな」

「なんでもいいよ……」

「で、圭祐には、そのいい声を生かして、声優をしてもらいたいと思っているんだ。ちなみに、俺の名前は正也ね」

宮本……。正也は親指を立てて、得意げに自分の方に向けた。

「声がいいなんて、思ったことないんだけどね」

僕は良太に向かって肩をすくめてみせた。

——長距離走向きだなんて、思ったことないんだけどね。

頭の中で、いつかの自分の声が重なる。

「俺も、圭祐はいい声だと思ってるよ。県大会での、ラスト一周のかけ声も、みんながしてくれていたけど、圭祐の声が一番スツと耳に入ってきたし。あ、ゴメン」

良太が口を一文字に結んだ。

謝ったのは、陸上のことを話してしまったからだだろう。褒めてもらえて、僕は嬉しかったのに。これじゃ、ダメだ。

「なんだ、いい声だと思ってたなら、そのとき言ってくれよ。僕は宮、いや、正也のことはまだ信用していないけど、良太が言ってくれることなら、自信が持てる」

そう言って、咳払いをして、「あ、あ」と発声練習のような声を出してみる。

「僕の声でタイムが上がるなら、いつでも応援に行くから、陸上、がんばれよ」

体育館内はざわついているのに、僕と良太のあいだにだけ、ぼっかりと空間ができてしまったように、音が止まった。やりすぎたか、と後悔する。

良太がズズツと鼻をすすった。だから、泣くところじゃないんだって。

「なーんて。じゃあ、椅子はよろしく。ありがとな」

僕は笑いながらそう言って、「いい声だっただろう」とおどけながら、正也の肩に腕をまわした。

もう、良太の方には振り返らない。

「正也、放送部の見学、今日の放課後にでも早速行くか」

本当に、昨日から、つまり高校に入学してから、僕は慣れないことばかりしている。

「行くに決まってるだろ、おーっ！」

正也が調子に乗って、片手を振り上げる。

II
なあ、良太、僕は高校生活を楽しんでいるだろう？

陸上部に入れなくても。

(湊かなえ『ブロードキャスト』)

〔設問〕

問一 —— 線部1「いつまでもその残像だけが頭の中に浮かび続ける」とあるが、良太の姿だけが頭に残っているのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつてはともに走っていた良太が、すっかり自分のことを忘れて軽快に走り抜けていく映像を見たことで、もう二人で一緒に走ることはないのだという現実を突きつけられたから。

イ 以前は同じ部で活動していた良太が早くも高校でも活躍していると知り、陸上部に入ることすらできない自分の一歩先に行く良太に、早く追いつかなければならないと思ったから。

ウ 良太が陸上部で走っている姿を実際に映像として見たことで、すでに高校でも活動している良太とは違って、自分はまだ走ることができないのだと改めて思い知らされたから。

エ 良太が新しい環境で努力する姿を見て、二度と走れなくなった自分は仲間に加わることができないと陸上部に入ること完全にあきらめたが、一方で悔しい気持ちにもなったから。

問二 —— 線部2「込み上げてくる涙を堰き止めるために」とあるが、この時の「僕」の心情として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は陸上を続けられなくなったことがやるせなく、自分を青海学院に誘った良太をうらんでしまう気持ちを押し殺そうとしている。

イ 陸上ができない悲しみにくれている自分のことなどおこまいなしに、部活紹介で盛り上がる新生に対するうらめしさを押し殺そうとしている。

ウ 他の新生たちとは違って、事故でケガをした自分はどれだけ望んでも陸上部で走ることができないという無念さを押し殺そうとしている。

エ 陸上がしたいのに自分はもう走れないという現実を前に無力感を覚え、そんな気持ちが誰にも理解されない辛さを押し殺そうとしている。

問三 —— 線部3「スン、とテレビが消えるように頭の中には何も映らなくなる」とあるが、この時の「僕」の様子が、「テレビ」によって表現されているのはなぜだと考えられるか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「僕」がぎゅっと目を閉じることで、それまで頭の中に映っていた映像が少しずつ消えていくことになるから。
- イ 全国大会の様子がテレビで放送されるような運動部の部活紹介から、「僕」は逃げ出したいと思っていたから。
- ウ 「僕」が外の音をすべて聞かないようにすること、テレビが消えるという表現がぴったり合っているから。
- エ この後、テレビのニュース番組のような放送部の女子生徒の声によって、「僕」が目を開けることになるから。

問四 —— 線部4「僕の意志とは無関係に、耳から頭を中心まで届き、じわじわと広がっていく」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 説明する先輩の声や話し方が、聞いている者を引きつけるようなものだったから。
- イ 陸上ができなくなった自分でも、放送部では活躍できるかもしれないと思い始めたから。
- ウ 運動部の紹介ではないので、走れなくなった自分を忘れて聞くことができるから。
- エ 自分を放送部に誘った宮本が、今どんな気持ちで説明を聞いているのか考えていたから。

問五 —— 線部5「大きなため息をついてしまふ」とあるが、なぜ「僕」は「ため息をつい」たのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本一を目指すという放送部の大きな目標を聞き、少しはその活動に興味を持ったが、陸上部のように自分の青春をかけるに値する部活ではないと思い直し、失ったものの大きさを痛感したから。
- イ 本来何の興味もないはずの放送部の活動に対してさえ、あれこれ考えてしまっていることに気が付き、高校でも部活に打ち込みたいといまだに自分が強く望んでいることに嫌気が差したから。
- ウ 放送部など自分にはまったく関係ない部活だと思っていたのに、先日宮本に放送部の魅力^{みりょく}を熱く吹き込まれたせいか、気が付けば放送部の部活紹介にのめり込んでいる自分にあきれたから。
- エ ケガで陸上をあきらめなければならなくなった運命にたえられなくなって、宮本が興味を持っている放送部の活動に文句をつけて気をまぎらわせている自分のひきょうさ^{ひきょうさ}にがっかりしたから。

問六 —— 線部6「『やっぱり、いいよ』」とあるが、この時の「僕」の心情として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 手伝いをすると言おうので椅子運びを頼んだものの、陸上部の仕事だったことが分かり、陸上部員である良太から助けしてもらわなければならないことに腹を立てている。
- イ ケガ人扱いはしてはいないと思つて椅子運びを任せましたが、実は陸上部員として「僕」を心配して声をかけてきたのだと分かり、必要以上に心配されたことに対する怒りを覚えている。
- ウ 何度も声をかけてくるのでしかたなく椅子運びを頼んだが、陸上部の仕事であるのだと言いきびれたことで表情を曇らせる良太の様子を見て、いきどおりを感じている。
- エ 片付け当番としての仕事だと言うので一度は椅子運びを任せましたが、陸上部員としての仕事であることを良太が黙っていたことが分かり、余計な気づかいをされていら立っている。

問七 —— 線部7「良太の顔が曇る」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「僕」に対する思いやりがまるで感じられないような言動をとる宮本が、「僕」を気づかっている自分の行動を遠回しに否定するような発言をしたから。

イ急に話に割り込んで「僕」のケガについても遠慮なく触れる宮本を見て、その行動の真意が分からずどのように反応して良いのか分からないから。

ウ二人で楽しそうに会話する「僕」と宮本を前にして、「僕」が宮本には本心を打ち明けていると気づき、「僕」に裏切られたような気がしたから。

エどんな人物なのかよく知らない宮本がなれなれしい態度で二人の話に入ってきて、その発言が自分の行いを責めるようなものを感じられたから。

問八 —— 線部8「良太はさらに落ち込むような気がする」とあるが、なぜ「僕」はそんな「気がする」のか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア良太の方が「僕」とはずっとつきあいが長いはずなのに、「僕」と昨日知り合ったばかりの宮本の方が「僕」の本心に気付いていたということがはつきりしてしまうから。

イケガ人扱いされるのを嫌がっているという「僕」の気持ちを良太はこれまで分かっていたのに、宮本はその気持ちを分かっていたことがはつきりしてしまうから。

ウ「僕」は自分にだけ本心を打ち明けてくれていると良太は思っていたのに、つきあいの浅い宮本にも自分と同じように心を許していたことがはつきりしてしまうから。

エ宮本と「僕」が中学のときから親しいのなら、ケガをした「僕」との接し方を相談できると良太は期待していたのに、それができないということがはつきりしてしまうから。

問九 —— 線部9「まともや、思ってもいないことを宮本に言ってしまった」とあるが、なぜ「僕」は、こんなことを言うのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア放送部に入るかは分からないが、陸上部ではない部活を見学することで自分が夢中になれる新しい何かを見つけられるかもしれないと思っているから。

イ青海学院では自分は陸上部だけではなくどの部活にも入らないつもりであることを知ると、良太がさらに苦しむことになってしまうと考えているから。

ウ放送部に入ることはずでに決めているが、活動を見学もせずに入部することで二人に真剣さが足りないと思われてしまうのではないかと考えているから。

エ自分は高校では部活に入るつもりはないとはつきり口にする、自分を熱心に放送部に誘ってくれている宮本が悲しむかもしれないと思っているから。

問十 —— 線部10「良太の顔も泣き笑いのように見える」とあるが、「良太の顔」は「僕」の目になぜそう「見える」のか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア良太が、自分が宮本と一緒に放送部に入ることに反対していると思っっているから。

イ良太が、自分が何であれ部活に入ることを喜んでくれると思っっているから。

ウ良太が、自分が無理して嘘をついていることに気付いていると思っっているから。

エ良太が、自分と宮本のやりとりを聞いてとまどっていると思っっているから。

問十一 —— 線部11「なあ、良太、僕は高校生活を楽しんでるだろう？ 陸上部に入れなくても」とあるが、この時の「僕」の心情を八〇字以上一〇〇字以内で答えなさい。ただし、「陸上部に入れなくても」「高校生活を楽しんでる」という言葉に込められた、良太に対する思いと自分自身に対する思いの二点にふれること。

問五 〳〳〳線部「入院中、良太は何度か病院に見舞いに来てくれた」とあるが、あなたが良太の立場であったとしたら、見舞いに行った際、どのように「僕」と接するのがよかったと考えるか。次のA・Bのうちどちらかを選び、あなたがそう考える理由を答えなさい。ただし、本文に示された「僕」の心情を参考にして答えること。

A たわいのない雑談も交えながら自分の近況や陸上部のことを話し、その流れでそれとなく「僕」の足の状態を尋ねる。

B 自分から陸上や「僕」の足についての話題をふることはせず、「僕」がその話をしてきたら、逃げたりはぐらかしたりせずに真剣に受け答えをする。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1 何を今ごろと言われそうだが、いわゆる若者言葉で、ヤバイという言葉の意味を聞いたときは正直驚いた。私たちが使ってきたニュアンスとはまったく逆。「あの試験どうもヤバイなあ」と言えば、落っこちそうだということだったはず。いつの間にか「このコーヒー、めっちゃヤバイ」が、すごく旨いというニュアンスになっていた。

言葉が時代とともに変わっていくのはやむをえないことであり、とどめようもないところがある。いまとなっては「ら抜き言葉」の是非を云々すること自体、どこか間が抜けていると感じるほどに、わずか20年ほどのあいだに「ら抜き言葉」が一般化してしまった。

2 私自身はいまもはかない抵抗を続けていて、どうしても「見れる」とか「食べれる」などの「ら抜き言葉」は使えないし、使うつもりもないが、若者たちの「ヤバイ」にはそれとは違った違和感と危惧を抱いている。「ヤバイ」が「旨い」「おもしろい」「カッコいい」「素敵だ」「気持ちいい」など、ほんらいかなりニュアンスの違った感覚、感情をすべてひっくるめて一語でダイベンしてしまおうというところにまず引かかる。

3 ある感動を表現するとき、たとえば「good」一語で済ませてしまうのではなく、そこにニュアンスの異なったさまざまな表現があること自体が、文化なのである。「旨い」にしても、「おいしい」「まろやかだ」「コクがある」「とろけるようだ」などなど、どのように「旨い」かを表わすために、私たちの先人はさまざまに表現をクフウしてきた。それが文化であり、民族の豊かさである。

4 いつも、もってまわった高級な表現を使えというのではまったくないが、必要に応じて、自分自身が持ったはずの（感じ）を自分自身の言葉で表現する、そんなキカイは、人生において必ずオトスれるはずである。そんなときのために、私たちは普段は使わなくともさまざまな語彙を用意しているのである。語彙は自然に増えるものではなく、読書をはじめとするさまざまな経験のなかで培われていくものである。すでに大野晋氏の言葉を紹介したように、ひよっとしたら一生に一度しか使わないかもしれないけれど、それを覚悟で一つの語彙を自分のなかに溜め込んでおくことが、生活の豊かさでもあるはずなのだ。

すべてが「ヤバイ」という符牒^⑩で済んでしまう世界は、便利で効率がいいかもしれないが、その便利さに慣れていってしまうことは、実はきわめて薄い文化的土壌^⑪のうえに種々の種を蒔くことに等しいのであるかもしれない。

「ヤバイ」は多くの形容詞の凝縮^⑫体であると考えることができる。「ヤバイ」一語で済ませるのではなく、それを自分の側からもっと細かいニュアンスを含めた表現によって深めたいという話をしてきた。

しかし、先にあげたさまざまな状態や感情を表す言葉は、それでも一般的な、最大公約数的な意味^⑬を担った形容詞なのである。必ずしも、その人独自の表現というわけではなく、誰にも通用する表現法であることからは、「ヤバイ」とそんなに違ったものではないという反論も可能である。

話が飛躍^⑭するようだが、近代の歌人に島木赤彦がいる。彼はアララギ派の歌人であり、アララギは「写生」をその作歌理念に掲げていた。なぜ写生が必要なのか。赤彦は『歌道小見』という入門書の中で、「悲しいと言え甲^⑮にも通じ乙^⑯にも通じます。しかし、決して甲の特殊な悲しみをも、乙の特殊な悲しみをも現しません。歌に写生の必要なのは、ここから生じて来ます」と述べる。

短歌は、自分がどのように感じたのかを表現する詩形式である。歌を作りはじめたばかりの人の歌には、悲しい、嬉しいと形容詞で、自分の気持ちを表わそうとするものが圧倒的に多い。作者は「悲しい」と言うことで、自分の感情を表現できたように思うのであるが、これでは作者が「どのように」悲しい、うれしいと思ったのがイツコウ^⑰に伝わってこない。赤彦の言う作者の「特殊な」悲しみが伝わることがない。形容詞も一種の出来合いの符牒^⑱なのである。

斎藤茂吉は島木赤彦と同時期に「アララギ」を率いた近代短歌の巨匠^⑲であるが、彼に、母の死を詠んだ一連がある。歌集『赤光』中の「死にたまふ母」一連である。

死に近き母に添寝^⑳のしんしんと遠田^㉑のかはづ天に聞ゆる

のど赤き玄鳥^㉒ふたつ屋梁^㉓にゐて足乳根^㉔の母は死にたまふなり

誰もが知っている歌であろう。一首目は「死に近き母」をはるばる陸奥^㉕の実家に見舞い、添い寝をしている場面である。普段は気にもならない蛙^㉖の声が天にも届くかと思われるほどに聞こえてくる。決して騒がしい声ではなく、しんしんと天にも地にも沁みいるような声である。一首が言っているのはそれだけのこと、まことに単純な事実だけを詠っている。二首目も、母がもう死のうとしている枕元^㉗、ふと見上げると喉^㉘の赤い燕^㉙が二羽、梁^㉚に留まっていた。ただそれだけである。

ここには「悲しい」とか「寂しい」とか、そのような茂吉の心情を表わす言葉は一つ使われていないことに注意して欲しい。にもかかわらず、私たちはそのような形容詞で表わされる以上の、茂吉の深い内面の悲しみを感受することができる。考えてみれば不思議な精神作用である。文章の上では何も言われていない作者の感情を、読者はほとんど何の無理もなく感受することができているのである。

もしこれらの歌のなかに、茂吉の感情として「悲し」「寂し」などの形容詞が入っていたとするならば、一般的な感情としては理解できるが、それだけではけっしてその時の茂吉の悲しき、寂しさを表現したものにはならないだろう。悲しい、寂しいという最大公約数的な感情の表現でしかないからである。「決して甲の特殊な悲しみをも、乙の特殊な悲しみをも現しません」と赤彦の言う通りである。

短歌では、作者のもっとも言いたいことは敢えて言わないで、その言いたいことをこそ読者に感じ取ってもらおう。単純化して言えば、短詩型文学の本質^㉛がここにあると私は思っている。

これはかなり高度な感情の伝達に関する例であるが、私たちは自分の思い、感じたこと、思想などを表現するのに、できるだけ〈出来あいの言葉〉を使わずに、自分の言葉^㉜によって、自分の思いを、人に伝える。この大切さをもう一度確認しておきたいものだと思う。

ヤバイ、カワイイだけで通用していた社会は、すぐに卒業ということになり、いよいよ実社会へ出ることになる。就職という課題が目の前にちらつきだすと、途端^㉝に言葉遣いが変わってくる。「オンシヤは」などと言い慣れない言葉が飛び出すようになるのを見ているのは痛々しいことだ。

これもマニュアルなのだろうが、もし私が会社側の面接官だったら、「オンシヤ」などという出来あいのマニュアル通りの言葉を使うような若者は、イの一番に匆^㉞ねてしまうだろうと思うのだが、どうだろう。すでにできてしまっている言葉の

世界で、みんなが使う言葉でしか自分を表現できない若者に、いったい独創性とか個性とかを期待できるものなのだろうか。一企業を主体的に担うに足る人材とは、そんなものではないはずである。

(永田和宏『知の体力』)

② 語彙…単語の集まり。

符牒…印。記号。

甲・乙…ここでは順番を表す記号。一、二、三のようなもの。

巨匠…ある方面の技能に、特にすぐれている人。多く芸術についていう。

オンシヤ…御社。

〔設問〕

問一 〰〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1 「何を今ごろと言われそうだが」とあるが、筆者がこのように言うのはなぜか。その理由として適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ある言葉が示す意味が時代とともに移り変わっていくことはとどめようもなく、どうにもならないことだと思つてい

るから。
イ 若者がヤバイという言葉を使つた意味とは違つた意味で使つてい

るから。
ウ ある言葉が若者によって使われることでまったく違う意味に変わってしまうようなことは、よくある現象だと思つて

いるから。
エ ヤバイという言葉が、若者の間で以前とは違つた意味で使われていることはすでに広く知られていることだと思つて

問三 ——線部 2 「私たちが使つてきたニュアンスとはまったく逆」とあるが、どういうことか。その説明として適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もともとは否定的な意味を表現するために使われていた言葉であるのに、いつの間にか肯定的な意味で使われるよう

になつてきたということ。
イ もともとは意味内容が限定的で使いつらい言葉だったのに、いつの間にか感情を簡単に表現できる言葉として使われ

るようになつてきたということ。
ウ もともとは若者の間だけで使われていただけの言葉が、いつの間にか大人もふくめて広く世の中で使われるよう

になつてきたということ。
エ もともとは多くの形容詞の凝縮体であつた言葉が、いつの間にか肯定的なニュアンスだけを示す言葉として使われ

問四 ——線部 3 「若者たちの『ヤバイ』にはそれとは違つた違和感と危惧を抱いている」とあるが、筆者は「若者たちの『ヤバイ』」という言葉に「違和感と危惧を抱い」た上で、どのような表現をすべきだと言つているのか。六〇字以上八〇字以内で答えなさい。ただし、次の言葉を必ず用いて答えること。

「ヤバイ」

問五 —— 線部 4 「最大公約数的な意味を担った形容詞なのである」とあるが、どういうことを言っているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 例えは「悲しい」という言葉で表されることになる人間の感情も、それを感じているそれぞれの人間の思いは正確に言えば異なるものであるはずだが、「悲しい」という同じ言葉によってまとめて表現されているということ。

イ 例えは「うれしい」という言葉では表現しきることができないような喜びがあったとしても、「うれしい」という言葉しか「うれしい」を表す言葉がないので、「うれしい」という言葉を使う以外の方法は無いということ。

ウ 例えは「さみしい」という言葉で表現される状態にある人は、心細さや怖さなどさまざまな感情を抱えているかもしれないのに、その状態を「さみしい」という一つの言葉にしてしまうと、表現されない感情が残るということ。

エ 例えは「美しい」という言葉で表現される状態はさまざままで決して一つではないはずであるが、さまざまな「美しさ」が「美しい」という言葉によって簡潔に示されることで、本来の「美しさ」が表現できなくなるということ。

問六 —— 線部 5 「特殊な」悲しみ」とあるが、筆者の論に従った場合に、「特殊な」感情がもつとも伝わりやすい形で表現された和歌の例を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。その際、() で示した現代語訳を参考にする。

ア 玉敷きて待たましよりはたけそかに来たる今夜し楽しく思ほゆ

(宝石をちりばめてお待ちくださるよりは、私はずかずかと来ました今夜こそが楽しく思われます。)

イ 父母が頭かききなで幸くあれて言ひし言葉せ忘れかねつる

(父や母が兵士としての出発前に頭をなでて、「元気でいろよ。」と言ったその言葉を忘れることができない。)

ウ 月見ればちぢにもこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

(月を見ると、あれこれと考えてなんとなく悲しく思うことだ。私だけのために秋があるわけではないのだが。)

エ 別るれどうれしくもあるかこよひよりあひ見ぬさきになにを恋ひまし

(一時の別れではあるが私はうれしい。今夜からは、あなたの前は誰を恋しく思っていたかと思うようになった。)

問七 —— 線部 6 「短詩型文学の本質」とあるが、筆者は斎藤茂吉の歌のどのようなところに「短詩型文学の本質」があると考えているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「悲しい」「寂しい」といった言葉を用いればすぐに心情が伝わるのに、敢えて用いないで、自分の気持ちを読者に感じ取らせようとしているところ。

イ 「悲しい」「寂しい」といった直接的な表現をするのではなく、比喻などの独特な表現を用いることによって、自分の心情を間接的に表しているところ。

ウ 「悲しい」「寂しい」といった言葉では決して言い表わすことのできない心情を、ただ事実のみを詠むことで表現し、読者に受け取らせているところ。

エ 「悲しい」「寂しい」といった心情を表す言葉を省いたことによって、茂吉の母が死んだときの様子を、より詳しく表現することができているところ。

問八 —— 線部 7 「自分の言葉」とあるが、ここではどのような言葉のことを言っているのか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あり合わせの言い回しを敢えて使わないことによって、なぜその表現を選んだのかを相手に考えさせるような言葉。

イ あらかじめ用意された決まり切った言い方でなく、他者に自分独自の感情や感覚を感じ取ってもらえるような言葉。

ウ 使い古されてしまった言い方ではなく、自分にしか思いつかない表現を用いることで新しさを感じさせるような言葉。

エ もっとも言いたいことは言わずに、具体的な心情を表す表現を盛り込むことで自分の思いを正確に伝えるような言葉。

問九 — 線部 8 「痛々しいことだ」とあるが、筆者はどのようなところを「痛々しい」と言うのか。次の中から適当なもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア すでにできてしまっている言葉を使い続けてきたせいで、自分が使う言葉のつまらなさに気がつけず、「オンシヤ」などという言葉を用いることが個性的だと信じているところ。

イ マニュアル通りの言葉を使い続けることでうまくやってこられたため、面接においても同様の言葉を使えば、必ず自分を選んでもらえると思いついでいるところ。

ウ 自分の言葉になっていない言葉を無理に使っているため、不自然な口調になってしまっているが、本人たちはそのことに気づかず、言葉遣いを正そうとしないところ。

エ 安易な言葉に頼^たってきたせいで、面接の場においても自分の言葉で自己を表現することができず、使い慣れていない出来あいの言葉に頼りきってしまうところ。

平成三一年度 帰国生入試 国語解答用紙(1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

解答用紙2

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問一
ウ

問二
ウ

問三
エ

問四
ア

問五
イ

問六
エ

問七
エ

問八
ア

問九
イ

問十
ウ

問 十				
る	を	う	ほ	良
自	持	ら	し	太
分	つ	や	い	に
の	程	ま	と	は
気	に	し	思	足
持	走	く	う	の
ち	れ	も	反	ケ
を	な	思	面	が
ご	い	っ		に
ま	と	て	陸	対
か	い	お	上	し
そ	う	り	を	て
う	現		続	責
と	実	こ	け	任
し	に	の	て	を
て	絶	よ	い	感
い	望	う	る	じ
る	し	な	こ	な
。	て	感	と	い
	い	情	を	で

問 三	
記号	
A	「僕」は足のケガのことで気を遣われたくないと考えているため、下手に遠慮をして陸上やケガの話を選ばない方が良く考えるから。
B	「僕」は走れないことに傷ついているため、こちらから一方的にケガの話をするより、「僕」が話してくるまで待った方が、「僕」の気持ちによりよくなると思うから。

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問 一	
d	a
訪	代弁
e	b
一向	工夫
	c
	機会

問二
エ

問三
ア

問 四			
を	分	言	ど
含	の	葉	ん
ん	感	だ	な
だ	じ	け	感
言	方	で	覚
葉	に	言	や
で	ふ	い	感
表	さ	表	動
現	わ	し	も
を	し	て	ッ
す	い	し	ヤ
る	、	ま	バ
べ	細	う	イ
き	か	の	レ
で	い	で	と
あ	ニ	は	い
る	エ	な	ウ
。	ア	く	一
	ン	、	フ
	ス	自	の

問五
ア

問六
イ

問七
ウ

問八
イ

問九
エ